

## 畫壇叢話(四則)

黒田清輝

○ミヤン(Jean-Francois Millet)千八百十四年我文化十一年に生れ、一千八百七十五年我明治八年に死す(は本邦でも此頃は大分知られて来たが、此の人の事に就て其子のフランソワ、ミレ氏から聞いたことが有る。拙者が此のフランソワ、ミレ氏と知り合に爲つたのは明治二十年年の冬、即ち畫の稽古を始めてから二年目に友達の米國人グリッフ井ンと云ふ男とフォンテンヌブロウの森の景色を寫す爲めにバルビゾン村のシロンと云ふ宿屋に泊つて居つた時で、ミレ氏は獨身者で毎日此の宿屋に飯を食ひに来るところから近かしく爲つた。ミレ氏は矢張畫かきで年は其頃三十二三でも有つたが、黒い髻をもじやもじや生やし、ベレを冠りサボをはきトリコの胴着をきて、丈は五尺をチヨット出る位、一方の足は少し曲つて居るので常に杖をついて居た、誰が見ても直にミレの子だといふことが分る位父のミレの畫像に似て居る、性質も至て温順で口數をきかない。此の人の話に、父のミレが或る時用事が有つて巴里に出たが、日本の錦繪を見附けて大喜びで數枚買つて歸つて、日本といふ國は野蠻だと人がいふけれども、こんな畫を作る人民がどうして野蠻の氣遣が有るものかと云つて居た。又其錦繪が大層自慢で、同村に住つて居た親友のルウソウ(Teodore Rousseau)千八百十二年我文化九年に生れ、一千八百六十七年我慶應三年に死す)に見せたところがルウソウがほしがつて是非一二枚分けて呉れと云つたが、ミレは聽かない、仕方が無いから兎も角貸して呉れと云つて持つて歸つた切りで、どうしても其錦繪を返へさないで、ミレは大に腹を立て、暫らくルウソウ

ウと口を利かなかつた。

○或時の話に、フランソア、ミレ氏が拙者に向つて、いつぞや日本から美術の取調べに佛蘭西へ来た人がルウブル博物館を見て、佛國の畫家の作は一つも見るに足るものは無いが、只ミレ一人丈は上手だと云つたことが新聞に出て居た。是れはなさないことで、自分に取つては親父のことをほめられたのだから喜ばしい事には違ひないが、佛國にミレの外には畫家が無いと云つて仕舞ふのはルウブルで何を見て行たのだらうか。

○ミレは畠に出て、百姓の仕事などをいつ迄も立つて視て居る人で有つた。是も亦フランソア、ミレ氏から聞いた。

○ドラクロワ(Eugène Delacroix)千七百九十九年我寛政十一年に生れ、一千八百六十三年我文久三年に死す)が衆議院の壁畫を作る時椰子樹の葉を描く必要が生じたから、先づ白墨で大体の形を畫き、夫れから弟子に色を着けさせる段となつたが、サテ参考と爲すべき椰子樹の葉が無いので、石竹の枝を持つて來て其れを弟子に與へ、天然物の内には大なり小なり似寄つたものが有るから、正物が手に入らぬ場合には類似のもので間に合はせるやうにするがよいと云て聞かせたさうだ。此の事に就て思ひ出すのは、吾師のコラン氏が海邊の圖を描かれる時に水色の布を庭に敷き、其れを海に見出て、其前にモデルを立てて寫生せられた。其時拙者に向つて彼の布が空の色を受けたる所は海面の色と殆んど同じ様だ、下圖を作るには是れで充分だと云はれた事が有る。又同氏のダフニス、エ、クロエといふ圖の遠景に羊の群が畫てあるが、其羊の色はフォント子一邊の路傍の石ころの色を寫されたのだ。此の邊の石の色と羊の色と能く似て居るといふ話をせられた事がある。

バルビゾンへの訪問記は『美術新報』二巻五号(明治四五年三月)に黒田が寄せた「二十余年前のバルビゾン村」(『絵画の将来』所収)にもみられ、米国人画家ウォルター・パーソンズ・ショウ・グリフィン(Walter Parsons Shaw Griffin 一八五〇—一九三五年)と同行し、ミレーの子息と知り合ったという内容も一致する。ただし本文献にある明治二〇年冬に、黒田がバルビゾンへ赴いたことを示す同時期の記録はなく、翌明治二二年に黒田が仏文でつけていた日記中に、二月二日から一七日にかけてバルビゾンに滞在し、ミレーの子息とも出会った旨が記されているが、この折には黒田は一人でバルビゾンを訪れ、グリフィンは同行していなかった(墓信祐爾「研究資料 公刊『黒田清輝日記』(下)」『美術研究』三八九 平成一八年六月)。グリフィンについては、荒屋鋪透「バルビゾン」の黒田清輝——画家グリフィンとの交友をめぐって(『芸術学』三田芸術学会)二 平成九年七月)を参照。

日本でのミレーの紹介は、明治九年から二二年まで工部美術学校の教師として日本に滞在したフォンタネージの指導まで遡れるが(石井柏亭『浅井忠』芸艸堂 昭和四年二月)、本文献が『精華』誌上に掲載された明治三〇年代半ばは『美術新報』にミレー伝が九回にわたって連載され(明治三五年八月—三六年二月)、白馬会が『ミレー名画全集』(明治三六年八月)を刊行するなど、伝記や画集という、まとまったかたちでミレーが取り上げられるようになった時期であった。そうしたミレー受容の原動力となったのが、実際にバルビゾンへ赴いた経験もあり、「ミレーの画が非常に好き」(久米桂一郎「黒田清輝君の芸術」『国民美術』一九 大正三年九月)であった黒田清輝に他ならなかった。黒田のミレーに対するまなざしについては、荒屋鋪透「J・F・ミレーの農民画と黒田清輝——明治二二年のバルビゾン、あるいはアメリカ人画家グリフィンについて」(山梨県立美術館『自然に帰れ』ミレーと農民画の伝統)展図録 平成二〇年九月)を参照。

なお本文献中の「いつぞや日本から美術の取調べに仏蘭西へ来た人」は、前掲「二十余年前のバルビゾン村」により、明治二〇年に美術取調委員として欧州を視察した浜尾新や岡倉天心を指していることがわかる。